

岩手県文化財調査報告書第七十八集

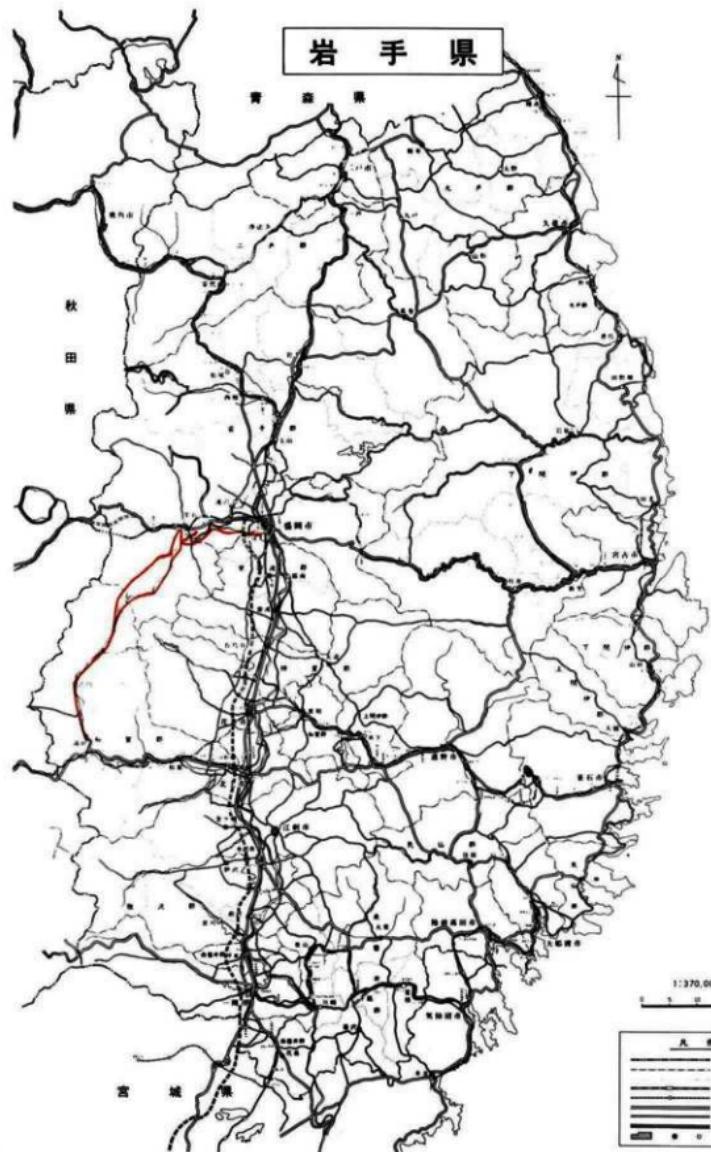
沢内街道

岩手県「歴史の道」調査報告

岩手県教育委員会

沢 内 街 道

岩手県「歴史の道」調査報告



沢内街道

(人文社37分の1より)

## 序

本県は、日本列島の東奥とよばれる地域に位置し、県では全国の面積を有しておりますが、山地が多く交通が大変不便であります。しかし、近年における社会開発の進展は、歴史的に山嶺のある山の道にも影響を及ぼし、日々近代的な道路の建設が県内各所で行なわれ、私達の生活を快適にしていますが、その反面、自然と人情に心を通わせることができた古道に残る遺産、遺跡、里塀や並木道の父祖遺跡が急激にその姿を消しております。

こうした現状を重視し、本県では昭和五十二年度から国庫補助を受け、4ヶ年計画での歴史の道の調査を実施して参りましたが、本年度は最終年次となりました。

本報告書は、本年度に調査した二街道のうち、盛岡城下から西へ進み、雪石宿で秋田街道より分岐し、山伏峠（長崎峠）を越へ沢内村を通り秋田領にいたる「沢内街道」について、街道の現状と文化財の保存状況など、その周囲の環境を含めて総合的に調査し、その成果を集成したものであります。

本書が、今後の交通関係遺跡の保護及び歴史の道研究の一助となれば幸いであります。また、調査に御協力いただきました調査員各位並びに関係市町村教育委員会をはじめ、諸資料を提供してくださった方々に対し、衷心より感謝申し上げます。

昭和五十七年三月

岩手県教育委員会

教育長 新里 益

## 例 言

「、本書は歴史の道「沢内街道」に関する報告書である。」

「、本調査は主として次にあげるものを収集し、調査を実施した。」

(1) 収集したもの

古文書、地誌類、紀行文、古絵図類や明治時代の実測図など。

(2) 調査した事項

(3) 道及びこれに沿う地域に残る遺跡の分布状況と保存の実態。

(4) 江戸時代の国界・藩界及び都名。

二、本調査の調査員は左記のとおりである。

主任専門調査員 草間俊一 岩手県立盛岡短期大学学長

専門調査員 細井 計 岩手大学教授

専門調査員 吉田義昭 盛岡市教委文化財専門員

地区調査員 盛岡市 菊池常雄 滝沢村文化財調査員

地区調査員 (栄石町) 川崎義伸 岩手県文化財保護指導員

地区調査員 (沢内村) 田中助専門 部落公民館長

四、調査の方法は、地区調査員が調査カードを作成し、調査カードにもとづき専門調査員が確認調査を行なった。

五、本書は、主任専門調査員草間俊一が執筆し、文化課が編集にあたった。

# 目 次

岩手県教育委員会教育長 新里 譲

## 序 例 言

### 第一章 まえがき

### 第二章 街道の現況と文化財・その他

#### 一 長橋峠越道

#### 二 山伏峠越道

#### 三 板橋・安庭道

#### 四 盛岡青物町一轍道

#### 五 街道沿いの文化財・その他

### 第三章 街道沿いの公開施設

### 附録 長橋峠越と山伏峠越の道について

### 写 真

### 地 図

30 21 19 18 12 11 10 9 8 7

## 第一章 まえがき

沢内街道は盛岡より沢内に行き、それから秋田県に通ずる道である。その道は「南部領内行程」（県立図書館本）に

一「盛岡ヨリ零石迄三里、此内川一ツ有北上川夕顛瀬廣サ四拾八間深サ五尺一尺、零石ヨリ沢内太田迄九里、此内川二ツ右坂一ツ有零石川廣サ拾五間深サ一尺、和賀川廣サ二間深サ一尺、坂山伏峠三里難处牛馬不通雪中ハ人モ不通一太田ヨリ馬坂境目迄一里半十廿一間比處難处也零上牛馬不通秋田領ウト

ウ村江出ル

とあるものであるが、これにあるように、はじめは秋田街道の零石から入って、沢内に行つたものである。零石から沢内に行くにも、ここにあるように山伏峠を越えて行つたのは寛文九年（一六六九）よりで、それ以前は長橋崎を越の道であった。

この零石から行く沢内街道の外に、途中の板橋から安庭を経て、山伏峠を越える道が一般に利用されるようになつた。このことについて、零石町の川崎調査員の報告を次に引用する。

### 一、調査上の区分

沢内街道は時代によって変遷しているので、現地調査を実施するにあたり次のように区分し調査した。

(A) 寛文九年までの路線をA路線とする。

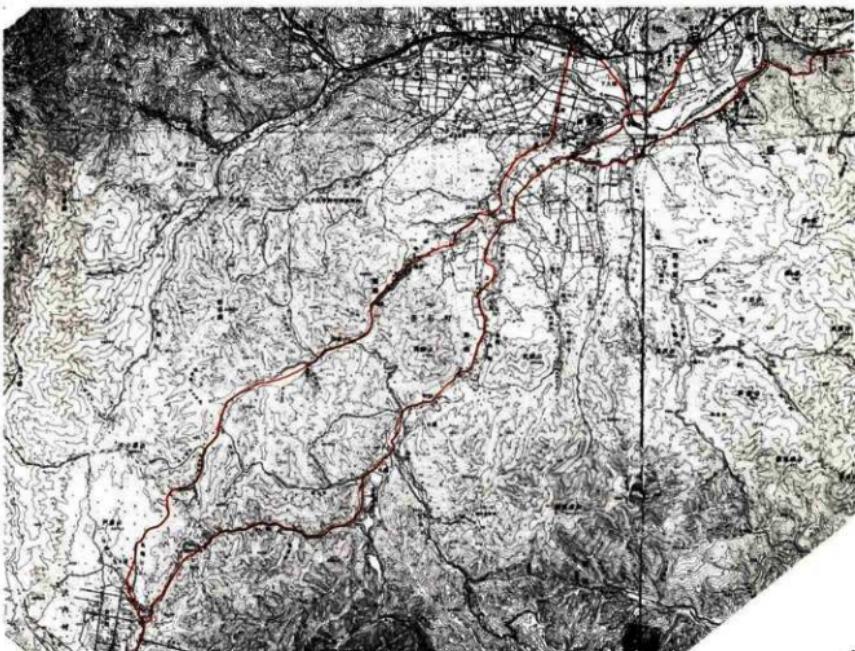
(B) 寛文九年開通の新道をB路線とする。

(C) 板橋より安庭に至る路線をC路線とする。

### 二、沢内街道の時代的要遷

(1) 寛文九年までの沢内街道（A路線）＝新道

寛文九年まで藩の公道であった沢内街道は、零石町下町の臨清寺入口を



起点とし、秋田街道より分岐し臨清寺と法華寺との間を通り南に直進し、根

堀にて零石川を渡り、麻野の原野を通り天沼にて、南川左岸を用治に通

り、矢川、用の沢を通り鶴宿川を左岸沿いに上り、一の渡辺で右岸に渡り、鶴宿にて左岸に渡り、鶴宿川沿いに廻り切留を通り、更に鶴宿川を廻り、待多郡に入りこの沢を廻って長橋村を越えて沢内村貝沢に至る路線である。

(2) 寛文九年に変更した沢内街道（B路線）—新道

寛文九年に新たに通した沢内街道は、前と同じく臨清寺入口にて秋田街道より分岐し、零石台地の南側の崖下にて、台地の南側崖下沿いに東に進み、下長根にて現在の馬道横手線に登り零石川左岸沿いに下り、安庭にて零石川を渡り安庭の部落を通り、南川と芦沢川合流点附近を芦沢に渡り、片子沢を通り南畠川を渡り柳沢を通り南畠川左岸に沿うて廻り、大村を通り、中の黒沢（地図にはトノ黒沢と表す）沿いに廻り山伏峠を越え沢内村貝沢に至る路線である。

資料

①零石通代官所記録「零石裁代日記」

寛文九年（一六六九）の条に

「此年沢内街道兩端へ折中候」とあり

②磐村肝人「磐市家留書帳」

寛文十一年（一六七二）年の条に

「此年沢内往来より大宿村通解所に其頭員沢元野坂被遣指置候に付  
大宿村の通を留此時より南畠往來二瀬成候（三月、十一日）」とあり

③ 板橋より分岐の沢内街道（E路線）

秋田街道より板橋にて分岐し、御所野を南に進み、元御所を経て安庭の渡に至る路線である、この路は一般には近道の間道として古くから利用さ

れ、公式の通行以外は零石を経由することが少なかったといわれている。

資料

①長山街道分岐点の明和八年（一七七一）の道標に

「是より左三丁程行沢内往來」とあり

②零石通代官所記録「日記」（寛政九年（一七九七）～嘉永元年（一八四八））

寛政十年（一七九八）十月の条に

「村版攝除場所書上 犯境限棒杭御の法に付 相建附事」

（中略）

沢内往来板橋野追分 豊村」とあり

豊村は先年の秋田街道の分担より除く沢内街道の分担となっている

後年に至って、この路線が公式に通行されることになり寛政十年に磐村の管理区域に定められ並木松も植えられている。

（中略）

旧道と新道の交通

旧道は、零石より長沼まで里裡おこる五里で、新道は六里十丁であり、又旧道は地形が概ね平日で川を渡る数も少く、新道は弓助山の山腹を通過する道は険しく、又川を渡る数が多く俗に四十八渡といわれ、一度豪雨に見舞われると、道路が川になり歩くのも困難となる等、山伏峠越えは難儀であったことである。又沢内より荷物等の運搬には馬が通れないので牛を利用したとのことである。

これがこの旧道は距離も、里裡も短く、地形的にも通行が比較的楽なため廢道後も、後の通行には、大正年代まで利用されたようである。

それと加えて、盛岡の仙北町から本宮・太田を経て、磐温泉に行く道から右内・日高を経て安庭で、山伏峠越え道と、道に立つて沢内に行く道が利用されたことは、江戸時代の初期によくある現象である。この道は明治時代

に小さな利用度が高かったのか、明治八年には県道十五八路線にて羽州街道として加えられ十五九路線となり、明治十一年には山形街道と称される。明治十四年の鳥取市七路線うち、山形道秋田街道を除いて、他の全部は県道である。さの第二回。

### 山形街道（其一） 盛岡市内 鳥取市内 佐賀市内 佐賀県立

である。この七限は明治十四年の「大馬車競走」によることを見る。翌年南相木・貝沢・川舟・新町・小野・越中島の上駅で、白本峰を越え、小松川から橋手へ出るもので、太田から馬坂峠を越えるものではない。従って、県内街道についても、以上の四つの路線について述べることにする。但し、盛岡から零石までの分については秋田街道で述べているので、その分は省略することとした。

なお、県内から秋田道に出るのに、前記の「南部領内行經地」にあるように「太田ヨリ馬坂道」、「里下千吉・間」とある道は果してどの程度利用されたか疑問である。というのは宝曆十三年（一七六三）配所の県内にあって書かれた高橋工部の「説文解字」には、日本語を東へ西へ南北の関門通り、越中島と称す。西に松原の開門小松川右りと称す。本大漢文であるが県内村

郡上史研究会員の泉川正訳注本によって書き下してある。以下同じことであるのを本道として、西の方を北の外城より本中に入るの間、利村に出るの間道四条有り、其の一、真坂道より仙北郡喜知村に通す。其の二、藤嶋より同郡六郷に通す。其の三、馬頭道より同郡横手の城下に通す。皆悉く高峻険峻の道なり。故に馬車共に不通なり。其の四、唯だ森野の、その内半易にして同郡里沢に通す。宮之子を秀衡街免と称す。当初同の往還か」とあり、半相坂道で述べた日本時既が本道で、他は間道とされてゐる。そのうち最も、今日最もはっきりしないのが馬坂道（風上山の駿坂道）である。昭和五十四年度の春に県内高冠を調査した際、地元調査員たちの道のあったことを知らない状態であったので、状況を申しておいたが、本年度の調査では

この道がどうなっているかを確かめることを主と/or>たが、現在は利用する人もなく、忘却された道であることを確認してしまった。

なお、この県内へ行くのに、現在は山伏越の道がトンネルによって通じているが、歩行して行く時代は長崎越の方が、山もけわしくなく、距離も近いので、坂には二の方が利用されることが多く、明治の道路整備に当ってもこの方を不適とするような運動がなされている。その関係の資料は最後に加えることにした。

この本うな県内街道は現地調査員の報告に基づいて昭和五十四年に半日、昭和五十六年に六月五・六日に家石町分の山伏峠道と長橋峠道を、十一月、十五・二十六日に県内村の長橋峠道・馬坂峠道と、羽州街道の田代石町分を、十一月三十日に盛岡市分の羽州街道を調査して執筆したものである。

## 第二章 街道の現状と文化財・その他

### 長橋峠越道

以下同じこと。

零石より県内への道は、零石の通りから、臨清寺に行く道を入り、臨清寺より間道四条有り、其の一、真坂道より仙北郡喜知村に通す。其の二、藤嶋より同郡六郷に通す。其の三、馬頭道より同郡横手の城下に通す。皆悉く高峻険峻の道なり。故に馬車共に不通なり。其の四、唯だ森野の、その内半易にして同郡里沢に通す。宮之子を秀衡街免と称す。当初同の往還か」と

あり、半相坂道で述べた日本時既が本道で、他は間道とされてゐる。そのうち最も、今日最もはっきりしないのが馬坂道（風上山の駿坂道）である。昭和五十四年度の春に県内高冠を調査した際、地元調査員たちの道のあったことを知らない状態であったので、状況を申しておいたが、本年度の調査では

この状況の河原を通った道は、地形整理などで、旧道は全く失なわれてゐる。零石川の根岸川の渡して、いよいよ正保四年の「南部領内行經地図」に「滴石川渡、弘十五間、深八尺、山川尻多く洪水渡不自用」とある。零石川を

渡って登った台地は諏野の台地で、開田のため旧道は全く消滅している。諏野を越つた旧道は天沼の余方と諏野神社のわきを通り、雨田の北岸の道を西に進み、天沼の抜川神社の右側を通り、川の沢附近で川を渡り、諏宿川の南側に出るが、これまでの旧道は残っていない。

諏宿川を渡つてから、民家の間を通る旧道は諏宿温泉を通り、諏宿神社の前を山合の道を進む、現在相手入れされて、良い道となっている。切留の山祇神社の前を通つて少し行くと、諏宿ダムとなる。ダムの中に旧道は水没しているが、水没地帯をすぎると、道は、本道で諏宿湖を通りて長橋峰に向つている。ダムを過ぎてからの方右はむかしは松の美林であったと云われるが、現在も立派な杉の茂林がある。なら、この長橋峰の道には以前林用航路が李石堅から沢内村の川舟まで入つていて、その航路のとりは下された跡が道筋に整備されていて、旧道との関係がどうなっているかはつきりしないところもある。殊に岬道は軌道が、船に利用されならない。

沢内村に入った旧道は、時近くに奥数を削の途出した長橋峰山が旧道のわきに発見、採掘された時間があって、その鈍山の道として利用されたこともあって、林道とは別に相当利用されていたらしいが、現在鈍山も駿歴になつたので、旧道は雜草や雑木に覆われている。且訴に下りて来た旧道は、且訴の牧草地のところで、一部消滅しているが、且訴の山祇神社のわきを通りて諏宿の観音寺の手前で、山伏峰からの道と、道になつた、山祇神社のところには割札場があり、それから、○〇〇ほど南に行つたところに、里塚がある。だと云われるが、この附近は開田などで、旧道が消滅しているのではあり明らかでない。

寛文九年に開拓された南望経山の山伏峰越えの沢内街道は、宝石の堀清寺の入りから入り、宝石台地から下りるところまでは同じであるが、下りたところで、台地の南斜面を東南に進み、おつきの附近で現沢内線に登り、安庭橋の下流（山安庭橋附近）にあった上船場を船で渡り、西安庭、升沢を経て男助庄の麓を迂回し、大村部落を通り山伏峰を登り沢内通りに住む路線（「季刊町史」）である。

この第3章の現況について述べると、台地帶での道は、長橋峰越えの分かれ口はだまつてはつきり残っていない。且安庭橋附近はダムで完全に水没してしまつたが、もとこの橋の上流に俗に船場と云う場所があった。且安庭橋を渡つて、少し行った所の分れに安庭の道標が立つていて、文永十三年の庚申塔には「右八村五左ハ往来みつ」とある。現在引立歴史民俗資料館敷地の東側に移されて現存する。

安庭の道標のところから旧道は諏野の台地の裾を回つて西南方に進み、諏宿川を渡つて戸沢城跡の下を通り、片子沢で台地に上つたが、現在この台地に上るまでの旧道はダムの水底となつていて、片子沢の旧道のわきに石碑が立つていて、元禄十二年の井手大吉の石碑である。片子沢からの旧道は、現在の駒道として改修舗装されているが、外舛沢川を渡るところで、少し上手の山ざわを沢に下りて渡つて外沢に出た。旧道は溪沢のところで大きく東に迂回していたが、この旧道は開田そとの外で破壊されて残っていない。

諏宿川を渡つて、小淵に来て、旧道は西側の男助庄の山麓を男助庄通りの大村へ出た。この旧道も林用軌道と一緒になつて、どの程度旧道が残っているか明らかなないところが多い。大村部落の手前は開田で旧道は消滅している。大村には道路きれに昭和十七年の駒道開通碑が立つていて、この附近の道路の改修が大規模であったことが想像される。大村部落では、現駒道の東側の道が旧道で、尾合川を沢の下まで下りて渡り、馬場に出た。この附近の旧道は、駒道に沿つて残つて、現在も部落で利用されている。その状

況は後の図版で示した

県道沿いに山麓を越った旧道の田茂木野のはずれに道標がある。文化七年の庚申塔に「右ハ沢内往来 左ハ山道」とある。沢内街道と高松沢への分れになっていたものであろうが、沢内街道は県道として改修され、松沢道は失なわれて、はっきりした分れとはならない。

この道標からの旧道は下ノ里沢の沢道を進んだと思われるが、山伏峠道になると旧道は残っているが、沢道は殆ど失なわれている。県道は沢治いに山の斜面を削って道路を通し、山伏峠はトンネルで沢内村に通じている。

山伏峠を越える旧道は、難本に覆われているが、轍をかきわけて走る所と、旧道のあとをたどることができる。坂の頂上より沢内村に降りたところに平安ノカミの石積がある。峠の山道を下りた旧道は、横川の上流を渡って県道に出るが、沢を渡つてからの旧道は消失して明らかでなくて県道になる。長崎越の道と、緒になるが、この附近の旧道は消失して、新しい県道が通っている。観音社をすぎ、旧道は県道となっているが、横川を渡つたところ

で河沿いに東側に出で、上大志田のバス停前まで県道と一緒になる。

それから南下する旧道は大茅沢のバス停附近の金刀比羅神社の隣地で、白道は西側に県道からはすれるらしいが、旧道のあとははっきりしない。もう一ヶ所で尾尻の上川舟のバス停前所の手前の左側に、里塚があり標柱が立つて少し行った藤原竹氏宅のわきに、里塚があつたと云われるが今はその痕跡もない。それから南下する旧道はほぼ県道と一緒になっているが高下のところでは西側に県道からはすれるらしいが、旧道のあとははっきりしない。

なる。この旧道も最近改修舗装された立派な道となっている。

小坂から大沢までは、旧道は県道に改修されている。太田は沢内の中心で県道の右手の西側に筋跡、八幡宮、浄因寺、玉泉寺と立派な社寺が並んである。そこを通りすぎたところから西に馬坂峠道があった。現在利用する人もなく、道もはっきりしない。ただ森林の開拓で途中までは道はついているが山手となると仔細解釈時に領師が通る位であるとのことである。この道は公式の道とされていたが江戸時代の終りに利用する人も多く平相街道の白木峠越が軒用されたらしく、それは明治初年の状況から推定される。

太田の分岐から、西ほどで沢内となる新町は代官所のあったところで、新町の北はの神明社と湧はある稲荷神社は沢内の主要な神社でその祭礼は盛大である。

旧道はそれから四kmほどで湯田町となり、湯田町に入つて旧道は、平和街まで述べたように、湯田から芳ヶ沢一越中畑から白木舟を越え小松川から横平へ出た。これについては平和街道で述べたので略する。

### 二 板橋・安庭道

秋田街道を玄石の手前、板橋（東町）より分れて南に進み、元御所を経て上船場に至る路線が近道の開闢として利用されることが多く、公式の通行している。路線が周知されるのは、利田の多寡によつてまるもので、本道でいる。路線が周知されるのは、利田の多寡によつてまるもので、本道でなくなりたての近道を、通行する人々が多かったところから、明和六年（一七六九年）に左瀬川の西の右岸、長山街道の分歧点に建てられていて石碑の道標に

「足より左二丁程行沢内往來」と沢内街道は板橋より入ることを表示している。後期に至つてからは、この路線が年貢米の運搬路線として公式に通行されるようになり、寛政十年（一七八二）には藤村の保護管理区域に定められ植立年代は不明であるが、並木松が植えられた。したがつて沢内街道といえれば、板橋より分岐するものと理解され、下石經山の路線は忘れ去られるようになつた。

この板橋・安庭道の現状について述べる。秋田街道の板橋から入る沢内街道は、季石町の七ツ森園地の南側方ソリンスタンドのあるところから南に入れる。この道路も御所ダムの建設により周辺道路の整備によって、改修舗装されて永源道となつていて、旧道の面影はない。元御所の旧道の左側に木立のある一角に石碑が集められている。享保十八年の「南無阿弥陀佛」が最も古い。その他天保一年、天保五年、嘉永七年、安政二年のものなど沢山の石碑がある。そこをすぎて、黒沢川を渡るところで、台地を下りて、旧安庭橋で、の山伏神越道と、緒になるが、現在この旧道は御所ダムの水没地にうついて、新しい橋が別にかけられている。

#### 四 感應青物町一繫道

舟橋の明治橋を渡つて、右に入る青物町は昔、ながらの家並を残している。青物町のはずれは東北本線で切斷されたので、そこに地下道を通つて向う側に出れるようにしている。この地下道は最近の自動車の大型化によつて、通行困難になつたので、最近では明治橋を渡つて、北上川から零石川の堤防上に新たな道路を開通させて本宮の方に通するようにし、古い青物町はもとの方へ行く東西の道路の交差点である。ここにも文政二年か安政二年か、政の上の字がはつきりしないが、「百萬遍供養塔」（高さ八八〇cm）に「右ハゆ道 左ハくわおん」とある。現在東西南の角にあるが、もと西南の角にあったと云われる。

坂岡十文字から、kmほど行った右手が、最近正面相城跡と推定されている太田の方八丁である。旧道の少し右側に外郭線の墓地跡を深あとが認められる。方八丁と道路の反対側に古市新田の石碑がある。文政十年「熊野二社岩磐山・西國二十三ヶ所供養塔」（高さ一六五cm）、天保九年「湯殿山・羽黒山・月山」（高さ一〇〇cm）、弘化五年「南無阿彌陀佛」（高さ一〇五cm）などが所ダムの建設に伴つて、西方に通じ、坂岡十文字一鹿妻一繫道通り、舊内を

経て芦洲で既述済内街道に接続する。その大半は旧道を改修したものであるが、御所ダムの建設に伴つて、新らしくつけ変えられたところもある。それについて以下説明することにする。

修理補装した道路を明治橋から、即ほど行った右手に宮次寺がある。曹洞宗の寺であるが、境内に文化元年の「南無阿彌陀佛」（高さ八五〇cm）、文化六年の「念佛供養塔」（高さ七〇〇cm）、安政四年の「南無阿彌陀佛」（高さ一二五〇cm）の外、文化九年七月廿八日の「百萬遍供養塔」は道標となつてている。即ち「南ハくわんむん 東ハもりおか 北ハ筆石みち 西ハゆみち」とある。この道標は近くのト文字にあつたものといわれるが、旧道の改修によつて移動させられたものであろう。なお、観音について地元で太田小学校長及川前郎氏に祠査を依頼したところ、都南村の飯岡山の麓にある秋葉神社がもと観音社と云われ、古い觀音をまつってて、遠くから参拝もあるとの事である。

宮沢寺から西に、左ほど行くと、右手に大宮神社がある。大宮神社は大同年間の創建と伝えられる古い神社で、応永二年の銘のある祠口があり、扁額も寶暦九年のものである。本宮神社から少し行くと坂岡十文字である。

太田橋を渡つて南へ都南村の飯岡の方に行く道と、青物町一本宮を経て弊の方へ行く東西の道路の交差点である。ここにも文政二年か安政二年か、政の上の字がはつきりしないが、「百萬遍供養塔」（高さ八八〇cm）に「右ハゆ道 左ハくわおん」とある。現在東西南の角にあるが、もと西南の角にあったと云われる。

与市新田より少々西に行つた、太田小学校からの道路が羽州街道につき少し西の道路ぎわに上鹿妻の石碑がある。一つは元禄拾八年の道標で、四角な石の一面に「右者湯坂道 左者猪去山道」とある。今一つ道標があり、年分はないが、「百萬法華塔」右無病庚申塔、高さ一メートルに「右者湯坂道 左者猪去山道」とある。なお元禄の道標は太田小学校の資料館に保管してある。

方八寸より、細ほど西に行つた四つ星の道路の南側に石碑群がある。四つある石碑のうち二つが道標になっている（猪去、本木の道標）。西に行く道は江戸時代のものは湯道になつてゐるが、明治・大正のものは「つなぎみち」（繋街道）になつてゐる。それから八〇〇mほど行った道の右側に三つの石碑がある。そのうちの二つが道標になつてゐる（大堀の道標）。文化十一年の庚申塔に「右ハ仙北町 左ハ沢内道」（沢内は沢田と読めるが、一応沢内とした）と安政四年の「南無阿弥陀佛」に「のぼりゆみじ くたり仙北」である。

大堀の道標から約一・五km、大欠山が聖石川に迫つて狭くなり、鹿妻原の取水口の手前に、鹿妻神社がある。なお取水口の近くに、記念碑が立つてゐる。聖への道はここから聖石川の河岸を山の斜面を削つて良い道路が現在通つているが、江戸時代は、この河岸の道路はなく、鹿妻神社のところから大欠山に登つて山越したものと思われる。その登り口は現在盛岡市でえびしきセンターとして駐車場を作つたのでなくなつてしまつたが、その削られたところを除くと山道が良く残つてゐる。山坂を越したとするには、郡内郷村志に「此湯城府西行二十里余。在九曲大折坂、民ノ致上。能治舊跡諸悪。」とあるのによる。しかし、明治の頃には川沿の道も開かれたものと考えられる。

この大欠山の登り坂の方には水飲み場もあり小山ではあるが、比較的良い道が通じてゐたらしく、今日でも旧道のあとが良く残つてゐる（勿論所により雑木や樹木に覆われているところもある）。この旧道は大森沢に出て、聖石川沿いの道に出たが、現在この旧道は御所ダムの水没地になつてしまつていて、聖

温泉近くにて台地に登るところには旧道は残つてゐる。高見見、民町の分岐点で、温泉へ行く道と鶴留・沢内へ行く道とに分れる。

分岐点から沢内への旧道は、聖石川沿の道を西に行くが、この道は昨年まで利用されていたが、御所ダムに水を溜めるようになつてから水没し、新しいダムサイドの道路が開通している。湯水時には形をあらわすだけである。その「k」ほど行った左手の河原に首内道跡があつた。

この道は矢塚川を渡つて町場に出るが、そのところの旧道も改修されながらも残つてゐる。旧道は暫く出来た湖畔道を横切つて、戸沢原の鶴留用のほどりで、山伏越道と一緒になるが、そのところは現在水没して、ダムの中になつてゐる。町場から戸沢までの旧道は写真図版を参照されたい。

## 五 街道沿いの文化財・その他

### 長橋峠越

#### (1) 鹿清寺（聖石町下町）

臨濟宗妙心寺派、寺主の十一面觀音は聖石七觀音の一つ内應觀音と呼ばれてゐる。二十点近い江戸時代の絵馬がある。

#### (2) 根崩の渡り跡（聖石町根崩）

はじめ歩行渡であったが、後には舟渡しとなつた。

#### (3) 天治の金刀比羅神社

弘化・年の額がある。

#### 4 矢川の抜田神社

部落の産土神で、鉄板作りの長さ四〇cmの劍に「奉納 抜田神社 嘉永四年」と刻まれてゐる。

#### 5 矢川の金神觀世音

鉄板作りの長さ四〇cmの劍に「金神觀世音 嘉永四年十一月九日」と刻まれてゐる。

れている。

(6) 横沢の川井神社

祭神は觀音で、案石の上觀音の一つである明治の神佛分離の際に神社になつたものである。

(7) 鶯宿の温泉神社

鶯宿温泉は加賀國の権相貢助によつて、貧が坂流に没つて傷ついた脚を治してゐるのを見て発見したと伝えられ、「湯師の湯」に因んで少名彦命を祀つたといわれる。

(8) 切留の山祇社

切留部落の産土神で、寛延四年（一七五一）の棟札に、享保四年（一四五五）八月十日建立されたが、寛延三年に全焼して、再建されたと記されてゐる。

(9) 長橋姉（沢内村川舟・長橋）

長橋姉山跡（川舟・長橋）

江戸時代の木に采えたと伝えられる

(10) 員沢の山祇神社

員沢の產土神である。

(11) 員沢の「里塚跡

員沢の子安地蔵尊

(12) 岩室大株現

岩室大株現

(13) 福田の観音社

大志田の山神社

(14) 大志田の大廣口神社

部落の中心的神社。牛をまつる神として北川舟の全般の牛の守護神である。

(15) 大荒沢の金刀比羅神社

大荒沢の一里塚跡

(16) 大平山・吉神社（川舟・八ツ又）

川舟の一里塚（川舟・上川舟）

(17) 松森神（川舟・高下）

現在の東側に徑五m位・高さ・五m位の土盛りがあるが、最近作ったものとも云われる。

(18) 泉沢の山祇神社

(19) 小坂の金刀比羅宮

(20) 中村の山祇神社

相模川の上流の珍らしい川中の岩島（弁天島）に祀られている。

(21) 猿橋の山神社

(22) 莲舟寺と民俗資料博物館

(23) 八幡宮と天銀杏

(24) 浄円寺・お茶地蔵尊

(25) 馬坂姉の人口

(26) 南太田供養碑

(27) 玉泉寺

(28) 天神館

(29) 上柳町の明神社

(30) 代官所跡

(31) 稲荷神社

(32) 田代館

## 山伏峠越

(1)

下久保の十・面觀音（雪石町長報）

下久保のはば中央にあったが、鶴所ダムのため、本没するので、現地に移

され、福島觀世音とも云われている。七觀音の一つ。

(2) 安庭の渡し

ダムで水没以前、旧安庭橋の少し上に、俗に船場という場所があり、そこ

に船場といつて居た家もあつた。

(3) 安庭の道標

幸石川を渡った安庭部落の人々の分れにあつたが、本没のため町立歴史民俗資料館の敷地に移転して立ててある。



- (8) 片手沢の石碑（西安庭・片手沢）  
元禄十一年の梵字の碑高さ一〇八cmと山世の板碑らしいもの（高さ一〇二cm）がある。

(9) 赤瀬神社（南畑・男助山）

鳥谷 深瀬の童主神で、祭神日本武尊。

寛永の年号のある額口ある。

(10) 山祇神社（南畑・大村）

大村部落の童主神。祭神大山祇命

(11) 田茂木野の道標



32 山伏峠

此道を経て、沢内里に往来ふ。六七月の頃は、山蛇大群出て、山みな  
雲霧のかかるるか如し。故人甚多く苦悩す。其ころほひには、蛇のために  
往来も絶ゆる事しほゝあり。（興風上記）（邦内郡村志）にも似  
た記事あり。

33 板橋の分岐点（雪石町盤・坂ヶ森）

芦沢城跡・沼田神社（西安庭・芦沢）

(4) 宮崎市立歴史民俗資料館（西安庭・下長谷地）

(5) 藤野福神社（西安庭・下長谷地）

(6) 鶴野神社（西安庭・下長谷地）

県道跡所葉波線の鶴野橋のたもとにあつたものを移転したもの

(7) 芦沢城跡・沼田神社（西安庭・芦沢）

往古芦沢上總介の據つて所として「御城」地名、松之木といい、本丸高二間位、廻三百五十尺川出水無し（芦沢）と伝えられている。城跡には沼田氏の祖先を

らに移転された。

まつたといわれる沼田神社がある。元禄以後の給馬百石ほどある。

五日百五十尺用出水無」と記されている。城跡に古沢氏の祖先を

らに移転させた。

15 元御所の美神社  
元御所の石碑群

51 鹿岡上文三の石碑  
年号と正支のところがかずれはつきりしないが「文政」か「安政」か「明治」かである。

羽州街道

(1) 古物町・七軒丁 盛岡砂子に「むかし押小路と云、文化九年十月七日

諸子並に命ぜらる」、七軒丁・吉物・西成は古物町の内也と云。又此所を南裏とも云。此下、わかし家数七軒有じ故、かく云と也。今の太神榮師を七軒丁と云は、此所に居れはなり」とある。

(2) 駒形神社（仙北郡西浦地五八）

文化九年、天保九年の手洗石あり。

(3) 宮沢山 曹洞宗。天恩山宮沢寺。（「盛岡砂子」には本宮山とある）「邦

内郷村志」には本宮山。現在は天恩山と称す。境内に文化九年の道標外、文化元年天十二月九日「衆念供養塔」（高さ八五〇cm）、文化六年七月廿一日「念佛供養塔」（高さ七〇〇cm）、安政四年十一月五日「南無阿弥陀佛」（高さ一五〇cm）がある。

文化九年の道標

東へくわらひ道  
東へもりおな道

文化九年  
百万遍供養塔

（梵文）  
七月廿一日

西へくわらひ  
西へもりおな

(4) 上鹿妻の道標

弘化五年

右者 湯坂道  
左者 唐古山道

七月 日

(5) 太田方八丁・三波城跡推定地

外郭の塁連跡、大溝跡、内城跡等の中の建物遺構の状況、出土遺物の上、師器などが相沢城跡の遺構や遺物との類似性が強く、洪水をうけたあとなど、志波城跡と推定されている。

昭和五十年度から調査が行なわれ、現在調査継続中、中期報告が出版されている。

(6) 与市新田の石碑（太田・上鹿妻・与市新田）文政十一年二月「碓野」社  
岩曾山・西浦上・七ヶ所供養塔。（高さ一六五cm）、天保九成文四月八日  
（天恩山・本宮山・月山）（高さ一〇〇cm）、弘化・巳年五月廿五日  
（南無阿弥陀佛）（高さ一〇〇cm）

(7) 上鹿妻の道標

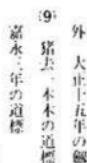
一高さ五〇cm、厚さ一五cm  
一輪、一七・五cm 花崗岩

(4) 大宮神社 大同間の創建と伝えられるが、太田の方八丁に近い神社で古くからの神社である。「應永二年（延喜十六年）正月廿一日」の年号のある額にかかる外、寛文七年（一六六七）、延宝四年（一六七六）の額に、安永四年（一七

安政四年の道標



(高さ・〇五四)



外  
大正十五年の觀音供養塔  
弘去・本木の道標

嘉永三年の道標



(高さ・八五四)

○ 百万遍供養塔

七月廿日

大正十五年

その外、和・年の「庚申塔」(高さ六七四)あり。  
41) 麻妻神社「玄田・猪去・田面野木」  
寛文十一年鹿児島元成した多津田甚六は、自分の母教せる閼象女神を  
勧請して、五穀豐饒の守護神としてまつたのにはじまるといわれる。



(高さ・〇五四)

12) 板碑と六傳

尾人土文字から、磐橋を渡つて来て、磐温泉に曲る角の附近に中ほの板碑

と石碑があった、現在は公墓地に移転してある。板碑は玄武岩に梵字一字  
刻まれただけのもので年分はない、高さ二・四四の大きいものである。

石碑は大正如来であるが、これも年分がないが、江戸時代中期のものと推定  
されている。

33) 高見・尺町の道標  
安政三年の道標



(高さ九・〇cm)

その向いに、同じ安政三年四月初日に「金華山大通又去」(高さ六・〇cm)  
がある

正徳二年（一七一七）の成岡市北山聖母山の僧徹山宗清の撰文碑巻になる「藤倉神祠記」がある。なお神社に之の額口に次の銘が刻まれている。

〔表題〕 奉納口 仁王百一代小松院御子 此宮本地鬼沢門 藤倉光土大

明神出現日 三代々子孫繁昌 九年号店永甲 戊天九月吉祥日 育手都之内鑿

村筋市之内人

親高橋村馬藤次千秋萬歳之願口正月吉祥日

〔裏面〕 奉納口 藤倉山光王大明神 奉懸勝口 奥州南部郡手郡寄石村

之内鑿村 筑市之内人高橋久右衛門藤定 代々子孫繁昌諸願成就 萬々歳

日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

萬々歳 日出度奉納口壬時享保十二年天吉祥日 高橋氏 願主藤定盛

## 第一章 街道沿いの公開施設

茅石町歴史民俗資料館

所在地 茅石町西安庵下良合地

規模 敷地面積 四、七二〇m<sup>2</sup>

建物面積 一七八m<sup>2</sup>

附属建物 曲り家（面積二六・四・畳・茅葺屋根）水車小屋

開・閉の補助を得て、昭和四十八年完成、昭和四十九年六月開館したもので、現在毎週月曜日、木曜日の二日午前九時半午後四時間館としている。町内の民俗資料をはじめ、考古・歴史資料などを展示している。

### 二 太田歴史民俗資料館

所在地 盛岡市太田 太田小学校敷地

規模 フレハブ・附建

地元太田の歴史や民俗に興心のある人々によって整えられたもので、資料は良く集められている。小学校の附属建物であるが、地元の有志によって運営されている。見学者報酬には、校長または教頭が案内してくれる

碧祥寺民俗資料館

所在地 沢内村太田 碧祥寺境内

規模 マタギ蔵庫（二、二、六畳間に第一、第二、第三資料部がある）

国指定のマタギ蔵庫資料四八五点、及び民俗資料一、五〇〇点、他に考古・歴史資料も多數收藏展示



且底堅ニ至リテ、概ニ合ス。此重輕凡五里、シテ、尾山佐幹浦ヨリヨリ遡キコト、里全時、地形變乎半里、ニシテ、唯西安延村内、内マ販トシヘビテ急販アリ。或岐道ト門ヲ向キシテ論スカタヌ。其餘ノノアシ配マルノミ。況且ノ急留置ノ販用アリ。

義用ハ既ニ不便ノ地ニ架橋アリテ水渠通、時ト雖モ、遂ニ阻難ノ憂ヒアリ。

開ス、丹川ハ川幅狭ク進度急シテ、架橋幅を便ナルカ如シ。其余險渓ヲ開

キ、庄屋ニシテ保堅ヲ穿ナキ宿泊ヲ渠済スルモ、路傍皆原野及林地ニシテ石右子、

前參御跡スノノアシアルナシ。以上ノ急留置、急流、急渓の各事ノ修築設置以

テ改効スベシ節、爰ニ字表題（則少石通）追引該地僅處ノ間替ニ此ノ呼称アル

ノミ。トシハ、又大川アリ。下流所謂安延浦也哉ナリ。該川ハ平日ニアリテ、河水淺弱ニシテ、水渠甚カタムカラス。地形著低ナルク以テ、霖雨若クハ、則其タメセバ、急流激湍急速ニモ、毫末二堪タリ。故ニ尋常地也ノ修築

ニテハ、保堅ヲ難キヲ以テ、疑モ既中ノ役政要セサルヲ得ス。蓋其構築ハ古ニ日

道本源ノ原タリ。既ニ其地を固多カサセ、其渠也ハ、又甚多カサセモノ如シ。由

是既成ハ、旧道ヲ復スルノ便利利ニシテ、現道山佐幹浦ヨリ不使不ナルハ、昔ノ如

ニ所ニシテ、蘇フヘカラサルナリ。然リ安延浦也哉ノ兩岸ニ往來スルモノハ、通航ヲ廢

スレハ、僅々通ラニ取リタマフ也。若ク帆船ラスエナリアリ、則、凡百事

業、利アレハ、考顧フハ古今ノ然ラニシム所ナリ。故ニ裏カ興シヲ計スルヤ判

ノ根柢也。而リ復セサルヘカラス。矧ヤ上陸陳スル田道也哉ノ如シハ、利通航

ニ涉ケリ。然レハ其間空タル不使不ナルハ、易止ムハ、把さるニ出ブルモノミセン。

且夫舊法ハ、竝別ニコソカ屢々持モノナララン歟。

#### （以下略）

この二つた次第は高橋子結「浪内風土記」にも摘載されている。

北川も古事記書石門、山伏道も古事記、有古より幽谷に入り、四十八瀬の大

河を越す。其の沿岸は狭隘にして、険峻な山並みをして、急流の渦流を拂つて、地

石壁等とて常に驚嘆場にして、日を暮さる處、駆逐野獣とて、夜を闇にして、波濤と

飛揚舞をなす。古風の上に登臨し、頗る、冬積雪にてて、通路を断つて、数

月なり。明治廿二年六月未だ、二十日未明、山伏種々尋、其の大なる者は峰に

假想、或は志望なる者、去前なる者、所交する者、或は農家と名づく者、或は

貧苦者、千百種類を引く者を数え、豪傑とて、其の如くに中止を演ず、朝

に、終日其人を追ひ頭を追ひ入る。音を響く聲を發す。聲をもの音響の音

が甚だ走るべからざる者有り。前壁に、渠り腹邊に沿ひ前壁を衝つて、深懸とも、倒

れば、渠に落する。故に其の音を覺える者など多く、通路を見る。旅客初めて

するを驚き曉いで、畏方手を揮つて走り足に引せて、通路を美はざる者無、  
「此の

時に於いて、防禦策を何とぞし難し。西諸島之が為めに、兵するに堪へば、然れども、

伏浦の前田山岳、日吉の巻二張、<sup>1</sup>群馬縣をともて飛騰するのみ。其の際難かに、

七十三年冬とも難ち辰に出て、西に入る故に、行人被さて丸を三句に成る。是れ

此地の、聚る事、惟だ後漢の地を経過すれば、其の苦を解くと云ふ。且相の城の如て、皆是れ

九水主に據るか。

とあり、長崎站について。

亥の方、苦にて、古手都密宿に出づる通道有り。則ち是れ古の名道なり。大石田表の御野野の長坂より、西に赴く。往昔上野教野合を以て、此の道を廢し更に山伏道を改めて、以て、その往路となるを云ふ。未だ其の実名の時代なるか詳かにせず。亦此の段程、山伏道を再興せんかを知らず。既善息せざるか。今や牧の放臥原に、此に仍て古道を再興せんか止ニ、伏浦の陰を越るのみならず、地理測路にして、迂直の通を以て、行程甚だ近し。古道の、条件を相異へて今に于けるも、残在如然たり。此の日延長さは、上に明ら、粗相承に、宜しく、且つ事に端末に、處にて、人數を放り易く、猶は表郵して、通かに命を乞うすべし。下民に至つては、城府の往来人馬の方堵を放さず、上下の便用益大なるべし云云。

とある。ことに、よつても明らかである。このように見ると、諸政時代の通路が、自然の地形の便を利用したものと限らないようである。<sup>2</sup>しかし、この山佐幹浦越が明治初年から早速とされて、改修されたので、現在の県道盛岡横手線になつてゐるのである。

## 長橋峠道



1 雪石町 沢内街の沢内街道分岐点



2 雪石町 駅附近の旧道



3 雪石町 根堀りの渡し



4 雪石町 用の沢附近の旧道



5 雪石町 葦宿温泉手前の旧道



6 雪石町 切留附近の旧道



7 雪石町 葦宿ダム



8 雪石町 待多部沢の旧道

至る者覺きぬいて思れ手を擇つて走り足に信せて道け色を失はざる者無し。此の



9 零石町 長横峠への道



10 沢内村 長横峠頂上附近



11 沢内村 長横駄山路



12 沢内村 貝沢より長横峠への道



13 沢内村 貝沢の山紙神社と制札場



14 沢内村 岩宗大権現下の旧道



15 沢内村 貝沢觀音社附近の旧道



16 沢内村 横川の横川の河岸で東に入る旧道



17 沢内村 大荒沢の一里塚跡



18 沢内村 松森神



19 沢内村 川舟の一里塚跡（東塚）



20 沢内村 川舟の一里塚跡（西塚）



21 沢内村 中村の山祇神社と旧道入口



22 沢内村 中村の旧道



23 沢内村 弁天島の巣島神社



24 沢内村 碧祥寺



25 沢内村 玉泉寺



26 沢内村 太田馬越峠への旧道入口



27 沢内村 馬越峠へ登る旧道入口



28 沢内村 沢内代官所跡（公民館）



29 沢内村 代官所役人の住宅跡



30 沢内村 新町の家並



31 沢内村 新町の稻荷神社

## 山伏峠道



1 雪石町 雪石台地の南側



2 雪石町 安庭橋近くの道標



3 雪石町 戸沢館遺番



4 雪石町 片子沢の石碑



5 雪石町 赤瀬神社



6 雪石町 小渕附近の旧道



7 雪石町 男助から入る旧道



8 雪石町 大村部落の旧道



9 雪石町 尻合川への旧道下り口



10 雪石町 尻合川を渡っての上り口



11 雪石町 馬場での旧道入口



12 雪石町 馬場での旧道出口



13 雪石町 田茂木野の旧道



14 雪石町 田茂木野の道標



15 雪石町 山伏峠頂上附近



16 沢内村 山伏峠のサノカミ

青物町一覧道



1 盛岡市 青物町入口



2 盛岡市 青物町の家並



3 盛岡市 駒形神社



4 盛岡市 改修された駁への道路



5 盛岡市 宮沢寺



6 盛岡市 宮沢寺の道標



7 盛岡市 大宮神社



8 盛岡市 大宮神社の鏡口



9 盛岡市 鮫岡十文字の現状



10 盛岡市 鮫岡十文字の道標



11 盛岡市 太田の方八丁



12 盛岡市 上鹿妻の道標



13 盛岡市 上鹿妻の道標(太田小学校保管)



14 盛岡市 薙去一本木の道標



15 盛岡市 大堀の道標



16 盛岡市 鹿妻神社



17 盛岡市 大欠山の登り道（水飲み場附近）



18 盛岡市 大欠山の頂上附近



19 盛岡市 大欠山の下り口附近



20 盛岡市の大森沢の旧道



21 盛岡市 高見三沢町の旧道



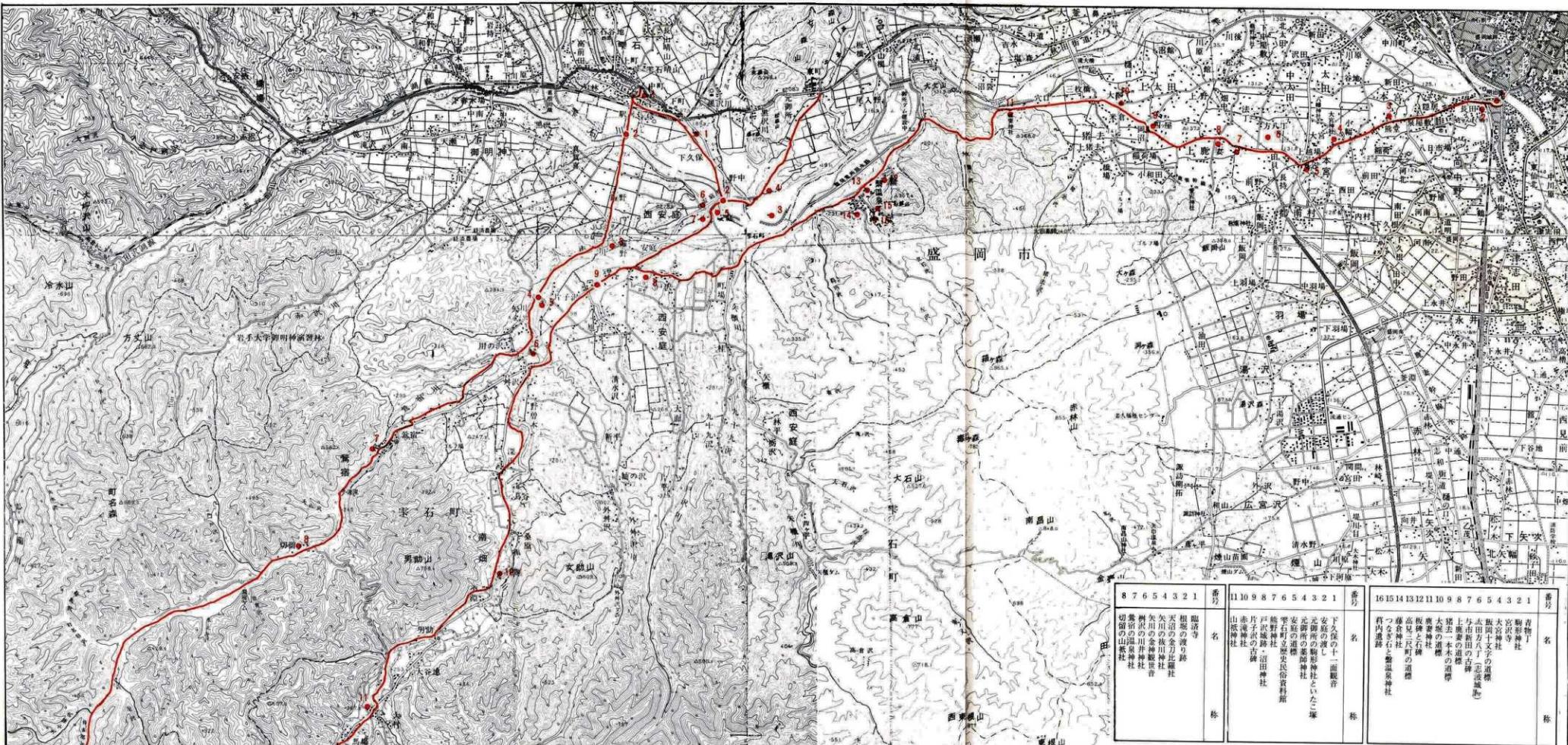
22 盛岡市 町場より対岸の蔦内を見る



23 盛岡市 町場より戸沢方向へ下る旧道

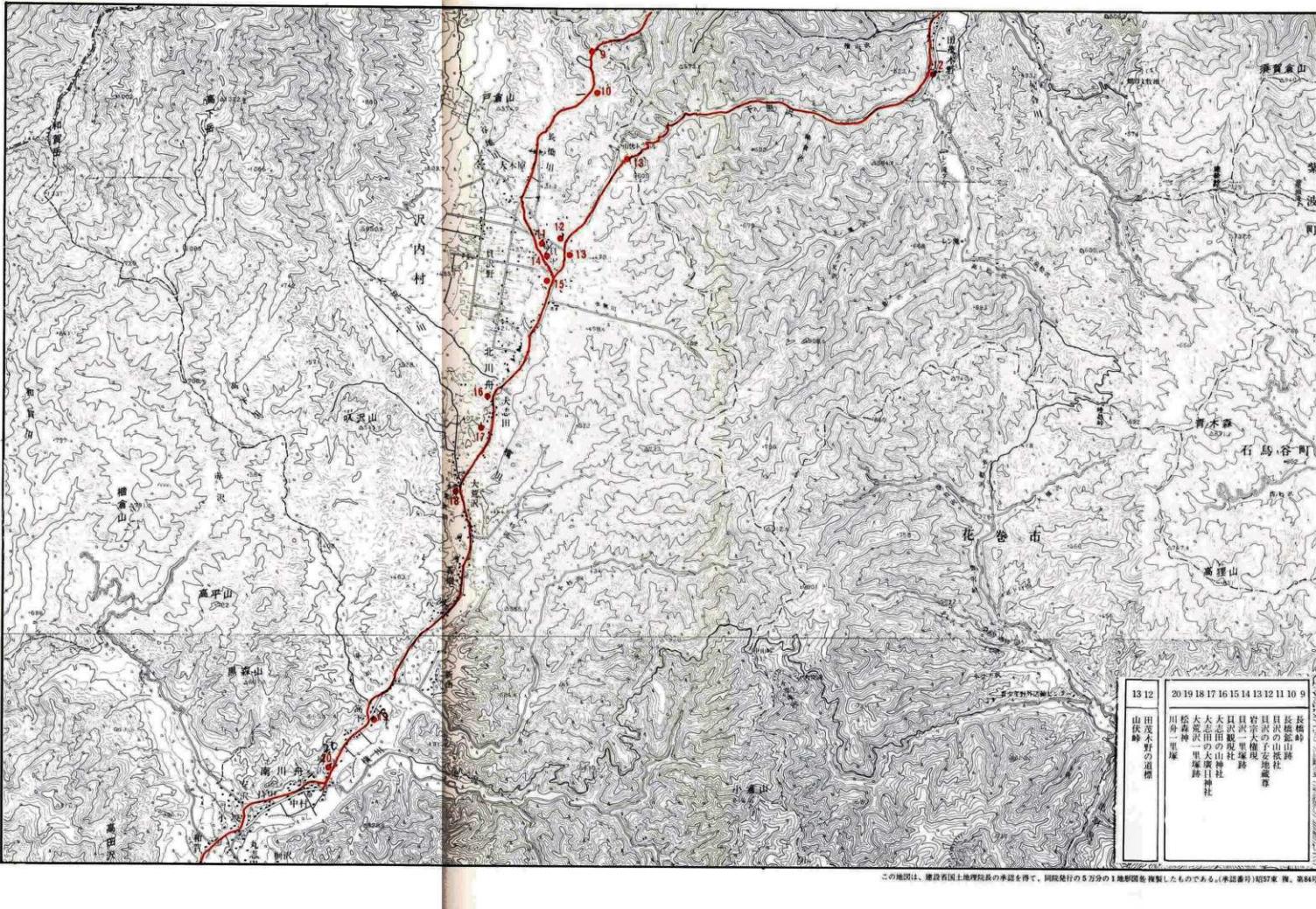


24 盛岡市 戸沢の愛宕川畔へ下りて行く旧道



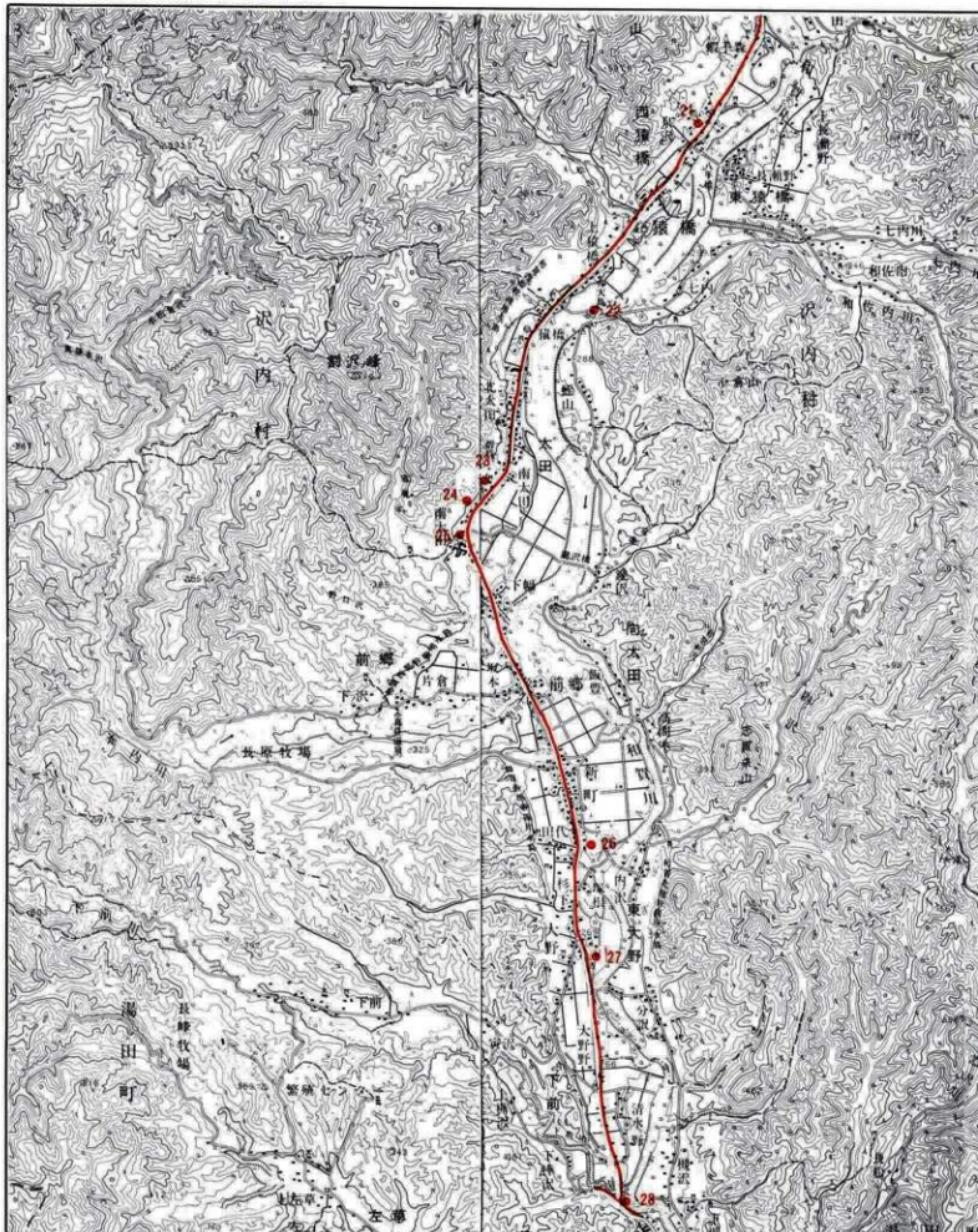
この地図は、建設省国土地理院の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭57東 裁 第84号

街道筋に残る文化財「沢内街道」



この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭57東復、第84号

街道筋に残る文化財「沢内街道」



岩手県文化財調査報告書 第七十八集

沢内街道

昭和五十七年三月三十日 発行

編集 岩手県教育委員会事務局文化課

発行 岩手県教育委員会  
印刷 杜陵高速印刷機